

クリスマス ―幼子のように―

嶋 村 誠

教会のクリスマス祝会で、サンタクロースに扮したことがあります。赤い帽子に赤い服、豊かな白いひげをつけたサンタクロースです。屋根裏部屋のようなところで見つからないようにそっと着替えをして待ちました。そして、司会者が会場の雰囲気盛り上げてくれている中、子供たちの待っている礼拝堂へ、プレゼントで膨らんだ大きな袋をかついで入って行きました。大きな歓声に迎えられ、たちまち子供たちに取り囲まれました。「いい子にしていたかい？おうちの人の言うことをよく聞いているかい？」などと、サンタクロースらしい声色を使いながら、子供たちひとりひとりにプレゼントを渡して回りました。

数分後、小学校高学年の知恵のついた生徒の中には、このサンタクロースは誰だろうなどと思う子もでてきました。なかにはサンタクロースの袖口から自分の手をつこみ、衣装の下に着ていた私のセーターを引っ張り出して、「あっ、嶋村のおっちゃんや！今日、この色の服を着てたのをわたし見たもん」と大声で叫び出す子も出てくる始末です。しかし、そう言いながらも満面の笑みを浮かべて、うれしい、楽しいクリスマスのひとときを過ごしているようでした。

やがて、祝会も終わりに近づき、サンタクロースが退場する時がやってきました。子供たちに手を振り、「来年までいい子にしているんだよ」などと言いながら部屋の戸口の方へ向かったときのことです。3歳の男の子がきれいな目に一杯涙をためて私に近づいてきて、涙声を絞り出すように「ま・た・き・て・ね」と言ったあの瞬間が今も私の脳裏に焼き付いています。疑う気持ちなどみじんもない3歳児の姿に感動すら覚えました。

聖書の「はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」（マルコによる福音書 10章 15節）という御言葉を思い出した瞬間でした。

100年以上前にアメリカの『The New York Sun』という新聞に8歳の女の子から“Is There a Santa Claus?”という投書があり、それに“Yes, Virginia, there is a Santa Claus.”という言葉とともに丁寧に答えた心温まる記事があります。インターネットなどに掲載されていますから、まだ読んでおられない方は検索されてはいかがでしょうか。

(商学部教授)